



# システムセキュリティ

---

この章では、StarOS のセキュリティ機能について説明します。

この章は、次の内容で構成されています。

- [パスワードの保護](#) (1 ページ)
- [ICSR 設定のサポート](#) (3 ページ)
- [暗号化された SNMP コミュニティストリング](#) (3 ページ)
- [強化されたパスワードセキュリティ](#) (3 ページ)
- [合法的傍受の制約事項](#) (3 ページ)
- [ユーザの追加、変更、削除](#) (4 ページ)
- [Test-Commands](#) (5 ページ)
- [暗号化のための COTS ハードウェアの使用](#) (8 ページ)
- [OS とプラットフォームの乱数生成器のサポート](#) (10 ページ)

## パスワードの保護

インスペクタおよびオペレータの権限レベルを持つユーザは、コマンドライン インターフェイス (CLI) を介して、コンフィギュレーションファイルに復号されたパスワードを表示できません。

## セキュアなパスワードの暗号化

21.0 よりも前の StarOS リリースでは、デフォルトで、システムは MD5 ベースの暗号 (オプション A) を使用してパスワードを暗号化します。これらのパスワードには、パスワードにランダムな 64 ビット (8 バイト) のソルトが追加されています。シャークキーは暗号キーとして使用されます。

シャークキーを設定すると、暗号解読に「共有秘密」の知識が必要な暗号化方式がサポートされます。この共有秘密の知識を持つシャークのみがパスワードにアクセスできます。パスワードを解読するために、シャークキーを知っているハッカーは、暗号化内の 64 ビットのランダムなソルト値の場所を特定する必要があります。

MD-5 で暗号化されたパスワードには、暗号化に使用される方法を識別するために、コンフィギュレーション ファイルに「+A」プレフィックスが付いています。



**重要** リリース 21.0 以降では、デフォルトはアルゴリズム B です。

リリース 15.0 以降では、別のタイプの暗号化アルゴリズムを指定できます。グローバル コンフィギュレーション モードの **cli-encrypt-algorithm** コマンドを使用すると、オペレータはパスワード暗号化と秘密暗号化のアルゴリズムを設定できます。21.0 よりも前のリリースでデフォルトの暗号化とパスワードのアルゴリズムは、前述のように MD-5 です (オプション A)。2 番目のパスワード暗号化のアルゴリズム (オプション B) では、暗号化には AES-CTR-128、認証には HMAC-SHA1 が使用されます。暗号キーによってパスワードの機密性が保護され、認証キーによって整合性が保護されます。リリース 21.0 以降では、アルゴリズム B がデフォルトです。このキーで暗号化されたパスワードは、コンフィギュレーション ファイルに「+B」プレフィックスが付きます。

リリース 19.2 以降では、3 番目のタイプの暗号化アルゴリズムを指定できます (オプション C)。このアルゴリズムは、暗号化と認証に HMAC-SHA512 暗号アルゴリズムの使用を指定します。このキーで暗号化されたパスワードは、コンフィギュレーション ファイルに「+C」プレフィックスが付きます。

また、リリース 19.2 以降では、暗号キーはシャース ID および内部の乱数生成器から取得した 16 バイトの初期化ベクトル (IV) からハッシュされます。同じ暗号キーと IV のペアを使用して 2 つのパスワードが暗号化されることはありません。シャース ID と結果の暗号キーを生成するために、セキュリティ管理者はシャースキーを設定する 必要があります。ローカル MAC アドレスに基づくデフォルトのシャースキーはサポートされなくなりました。

**cli-encrypt-algorithm** コマンドのシンタックスは次のとおりです。

```
config
  cli-encrypt-algorithm { A | B | C }
```

## 最新ではない暗号化および復号化のサポート

システムは、以前にフォーマットされた暗号化パスワードをサポートしています。暗号化されたパスワードのシンタックスは、暗号化に使用された方式を示しています。暗号化されたパスワードの前にプレフィックスが表示されない場合は、固定キーを使用した以前の暗号化方式が使用されます。暗号化されたパスワードに「+A」プレフィックスが含まれている場合、復号化方式はシャースキーとランダムなソルトを使用します。

ユーザが新しい設定を保存すると、生成されたファイルには常に最新の方式で暗号化されたパスワードが含まれます。ユーザは、以前の DES ベースの暗号化値を生成できません。ただし、将来のすべての StarOS リリースでは、引き続き双方向で暗号化可能なすべてのパスワードのプレーンテキストパスワード エントリをサポートします。

「ロックアウト」状態を引き起こすことなくシャースキーを変更するための推奨プロセスは、次のとおりです。

- 前のシャースキーを使用して、最後の正常な設定の設定ファイルをロードします。

- 必要な新しい値にシャードキーマを変更します。
- この新しいシャードキーマを使用して設定を保存します。

詳細については、「システム設定」の「シャードキーマの設定」を参照してください。

## ICSR 設定のサポート

シャード間セッションリカバリ (ICSR) は、冗長性ペアとして同様に構成された2つの VPC-SI シャード/インスタンスを採用する冗長構成です。

ICSR ペアは同じシャードキーマを共有します。2つのシャード/インスタンスに互換性のないシャードキーマがあることを ICSR が検出した場合、エラーメッセージがログに記録されますが、ICSR システムは引き続き実行されます。一致するシャードキーマがないと、アクティブピアがアウトオブサービスになった場合に、スタンバイ ICSR ペアはサービスをリカバリできます。スタンバイピアは、暗号化された形式でパスワードに引き続きアクセスできます。

ICSR ペアは、サービス冗長性プロトコル (SRP) を使用して、冗長構成が暗号化されたパスワードまたは DES ベースの双方向暗号化文字列と一致するかどうかを定期的に確認します。設定はソフトウェアに内部的に生成されるため、ユーザは ICSR の互換性をチェックするために使用される設定にアクセスできません。

## 暗号化された SNMP コミュニティストリング

Simple Network Management Protocol (SNMP) は、ネットワーク要素のパスワードとしてコミュニティストリングを使用します。これらのコミュニティストリングは SNMP PDU のクリアテキストで送信されますが、値はコンフィギュレーションファイルで暗号化できます。

**snmp community encrypted name** コマンドは、SNMP コミュニティストリングの暗号化を有効にします。詳細については、『*Command Line Interface Reference*』の「*Global Configuration Mode Commands*」の章をご覧ください。

## 強化されたパスワードセキュリティ

### 合法的傍受の制約事項

この項では、合法的傍受 (LI) のプロビジョニングに関連付けられている一部のセキュリティ機能について説明します。

## LI サーバアドレス

外部認証エージェント（RADIUSまたはDiameterなど）は、`access-accept`の一部としてLIサーバアドレスのリストを送信します。そのサブスクライバにすでにインストールされている、またはこれからインストールされるすべての代行受信については、認証エージェントから受信したすべてのLIアドレスとLIサーバアドレスを照合するためのセキュリティチェックが実行されます。この基準を満たすアドレスのみが、そのサブスクライバの代行受信情報を取得します。

キャンプオントリガーを設定している間、ユーザは、接続先のLIサーバアドレスを入力する必要はありません。そのキャンプオントリガーに一致するコールが検出されると、認証エージェントから受信したリストを使用してセキュリティチェックが実行されます。LI関連の情報は、一致するアドレスが見つかった場合にのみ転送されます。

アクティブのみの代行受信が設定されている場合、一致するコールが検出されると、認証エージェントから受信したLIアドレスに対してセキュリティチェックが行われ、代行受信の設定は拒否されます。

そのサブスクライバのLIサーバアドレスに関連する情報が受信されない場合、LIサーバアドレスは制限されません。



**重要** 認証エージェントを介して、最大5つのLIサーバアドレスがサポートされます。



**重要** RADIUS属性を使用したLIコンテンツおよびイベント配信の接続先アドレスを制限する機能は、PDSNおよびHAゲートウェイでのみサポートされています。

## 代行受信の変更

1人のLI管理者は、別のLI管理者が作成した代行受信にアクセスしたり、変更したりできます。代行受信が追加、削除、または変更されるたびに、変更に関するイベントログがすべてのLI管理者に表示されます。また、SNMPトラップも生成されます。

## ユーザの追加、変更、削除

システムに対するユーザの追加または削除は一般には行われません。同じように、ユーザの権限を変更することもまれです。ただし、システムが侵害された場合は、攻撃者が特権ユーザを追加または削除したり、権限を上げたり、他のユーザの権限を低くしたりすることがよくあります。

一般的なルールとして、権限の低いユーザが権限を上げたり、権限の高いユーザが入力したパスワードなどのセンシティブデータにアクセスしたりできないようにする必要があります。



**重要** システムは、これらのユーザがシステムを介して設定されている場合にのみ、ユーザおよびユーザ属性（権限レベルなど）の変更を検出できます。

## ユーザの追加または削除の通知

承認レベルの低いユーザは、承認レベルの高いユーザを作成できません。ただし、悪意のある攻撃者が高レベルの権限を持つユーザを作成できる場合は、他の高レベルの認可されたユーザを削除して、システムからロックアウトすることができます。

次の SNMP トラップは、ユーザが追加または削除されたときに管理者に通知します。

- **starLocalUserAdded** : 新しいローカルユーザアカウントがシステムに追加されたことを示します。
- **starLocalUserRemoved** : ローカルユーザアカウントがシステムから削除されたことを示します。

## 権限レベル変更の通知

ユーザの権限レベルが高くなるか低くなるたびに、SNMP 通知が送信されます。悪意のある攻撃者は、権限を何らかの方法で「昇格」させることで、より多くの権限を持つコマンドにアクセスする可能性があります。これが実行されると、他のすべてのユーザの権限を「降格」させることができ、その結果、適切な管理者がシステムからロックアウトされます。

**starLocalUserPrivilegeChanged** トラップは、ローカルユーザの権限レベルが変更されたことを示します。

## オペレーティング システム シェルへのユーザアクセス

**starOsShellAccessed** トラップは、ユーザがオペレーティングシステムのシェルにアクセスしたことを示します。

## Test-Commands

セキュリティ管理者または管理者権限を持つユーザは、以前に非表示になっていた `test-commands` の表示を有効にすることができます。CLI `test-commands` では、既存のコマンドの新しいコマンドキーワード、および新しいコマンドが表示されます。



**注意** CLI test-commands は、診断の使用のみを目的としています。通常のシステム操作では、これらのコマンドへのアクセスは必要ありません。これらのコマンドは、Cisco TAC の担当者のみが使用することを目的としています。これらのコマンドの一部は、システムパフォーマンスの低下、サブスクリバの削除、および/またはシステムの動作不能の原因となることがあります。

## cli test-commands モードの有効化

test-commands へのアクセスを有効にするには、セキュリティ管理者がグローバルコンフィギュレーションモードにログインし、**cli hidden** を入力する必要があります。

次に、このコマンドシーケンスを示します。

```
[local]host_name# config
[local]host_name(config)# cli hidden
[local]host_name(config)#
```

デフォルトでは、**cli hidden** は無効になっています。



**重要** 低レベルの診断およびテストコマンドやキーワードは、管理者または上位の権限を持つユーザに表示されるようになりました。CLIには、test-commands モードが有効になっていることを示すビジュアルインジケータはありません。

## CLI テストコマンドにアクセスするためのパスワードの有効化

セキュリティ管理者は、CLI テストコマンドにアクセスするためのプレーンテキストのパスワードまたは暗号化されたパスワードを設定できます。*password* の値は、起動設定情報とともに **/flash** に保存されます。**show configuration** コマンドと **save configuration** コマンドがこの値をプレーンテキストで出力することはありません。

グローバルコンフィギュレーションモードコマンドの **tech-support test-commands [encrypted] password new\_password [ old-password old\_password ]** は、CLI テストコマンドにアクセスするための暗号化されたパスワードまたはプレーンテキストのパスワードを設定します。

次に、このコマンドシーケンスを示します。

```
[local]host_name# config
[local]host_name(config)# tech-support test-commands password new_password [
old-password old_password ]
[local]host_name(config)#
```

新しいパスワードで既存のパスワードを置き換える場合は、変更を受け入れるために古いパスワードを入力する必要があります。

古いパスワードが入力されていない場合、または既存の設定値と一致しない場合は、「tech-support password is already configured」というエラーメッセージが表示されます。次に、

古いパスワードのエントリを受け入れるように求めるプロンプト（「Enter old tech-support password:」）が表示されます。

**old-password** `old_password` を入力することで、古いパスワードの入力を求められることなく、既存のパスワードを置き換えることができます。古いパスワードを誤って入力した場合、または古いパスワードを入力しなかった場合は、「Failure: Must enter matching old tech-support password to replace existing password」というエラーメッセージが表示されます。

クイック セットアップ ウィザード（Exec モードの **setup** コマンド）でも、テクニカルサポートのテストコマンドパスワードの入力が求められます。古いテクニカルサポートのパスワードを忘れた場合は、コンソールポートから直接 **setup** を実行して、新しいテクニカルサポートパスワードを入力できます。

テストコマンドのパスワードが設定されている場合、グローバルコンフィギュレーションモードコマンドの **cli test-commands [ encrypted ] password password** にはパスワードのキーワードを入力する必要があります。**encrypted** キーワードを指定した場合、`password` 引数は、パスワード値を含む暗号化された文字列として解釈されます。**encrypted** キーワードを指定しなかった場合、`password` 引数は実際のプレーンテキスト値として解釈されます。



**重要** `tech-support test-commands password` が設定されていない場合は、StarOS が新しいパスワードを作成します。`cli test-commands` に `password` キーワードを入力しなかった場合は、パスワードの入力が求められます（エコーなし）。また、CLI テストコマンドにアクセスするには、管理者が `cli hidden` を有効にする必要があります。

## Exec モードの `cli test-commands`

Exec モードコマンドは、Exec モードから `cli` テストコマンドを入力する特権ユーザが使用できます。

```
[local]host_name# cli test-commands [encrypted] password password
Warning: Test commands enables internal testing and debugging commands
USE OF THIS MODE MAY CAUSE SIGNIFICANT SERVICE INTERRUPTION
```



**重要** ユーザが CLI テストコマンドモードを開始するたびに、SNMP トラップ（`starTestModeEntered`）が生成されます。

## コンフィギュレーションモードの `cli test-commands`

低レベルのソフトウェアパラメータにアクセスできるようにするためのコンフィギュレーション コマンドには、権限を持つユーザがグローバルコンフィギュレーションモードでコマンド `cli test-commands` を入力した後にのみアクセスできます。

```
[local]host_name# config
[local]host_name(config)# cli test-commands [encrypted] password password
```



```
Warning: Test commands enables internal testing and debugging commands
USE OF THIS MODE MAY CAUSE SIGNIFICANT SERVICE INTERRUPTION
```



**重要** ユーザが CLI テストコマンドモードを開始するたびに、SNMP トラップ (starTestModeEntered) が生成されます。

## 暗号化のための COTS ハードウェアの使用

StarOS VPC インスタンスは、ソフトウェア内でパケットの暗号化とトンネリングを実行します。ただし、市販 (COTS) のサーバが Intel Communications のチップセット 89xx を使用し、このチップセットにパススルーするように VPC 仮想マシンを設定した場合、VPC インスタンスは自動的にこのハードウェアチップを使用してパケットの暗号化と復号を実行します。Intel Communications のチップセット 89xx は、Coletto Creek とも呼ばれています。



(注) VPC が暗号化と復号にハードウェアチップセットを使用するためには、サービス機能 (SF) VM のすべてで Intel Communications のチップセットを使用する必要があります。

COTS サーバがこのチップセットを使用しているかどうかを確認するには、**show hardware** コマンドを使用してすべてのスロットの情報を表示します。次に、Coletto Creek 暗号化アクセラレータを使用するハードウェア上の VPC SI インスタンスに対する **show hardware** コマンドの出力例を示します。

```
[local]swch32# show hardware
System Information:
  Platform           : KVM Guest
  UUID/Serial Number : 014A4D4F-7644-4CF1-C408-8ABB631B3E34
  CPU Packages       : 1 [#0]
  CPU Nodes          : 1
  CPU Cores/Threads  : 16
  Memory             : 16384M (qvmc-si-medium)
  Crypto Accelerator : Coletto Creek A0
Storage Devices:
  Virtual Flash      : Present
  Type               : 4096M disk
  Model              : ATA-QEMUHARDDISK
  Serial Number      : QM00001
  Hard Drive 1       : Present
  Type               : 16384M disk
  Model              : ATA-QEMUHARDDISK
  Serial Number      : QM00002
  Hard Drive 2       : Not Present
  USB 1              : Not Present
  USB 2              : Not Present
  CDROM 1           : Present
  Type               : cdrom
  Model              : QEMU-QEMUDVD-ROM
Network Interfaces:
  loeth0  addr 52:54:00:ae:b7:72 at virtio1, 1af4:0001 (virtio_net)
  RxQ(s)/RINGSZ/COALESCE: 1/256/-NA-
  TxQ(s)/RINGSZ/COALESCE: 1/256/-NA-
```



```

NODE-ID          : -NA-
port1_10 addr 00:1b:21:87:14:ac at 0000:00:06.0, 8086:10fb (ixgbe)
RxQ(s)/RINGSZ/COALESCE: 16/4096/500
TxQ(s)/RINGSZ/COALESCE: 16/4096/0
NODE-ID          : -NA-
port1_11 addr 00:1b:21:87:14:ad at 0000:00:07.0, 8086:10fb (ixgbe)
RxQ(s)/RINGSZ/COALESCE: 16/4096/500
TxQ(s)/RINGSZ/COALESCE: 16/4096/0
NODE-ID          : -NA-
```

次に、暗号アクセラレータがインストールされていないハードウェア上の VPC SI インスタンスに対する **show hardware** コマンドの出力例を示します。

```
[local]swch81# show hardware
System Information:
Platform          : KVM Guest
UUID/Serial Number : E0A26495-F822-4AC0-914D-B51332177C4D
CPU Packages      : 1 [#0]
CPU Nodes         : 1
CPU Cores/Threads : 16
Memory            : 32768M (qvmc-si-medium)
Crypto Accelerator : None
Storage Devices:
Virtual Flash     : Present
  Type            : 4096M disk
  Model           : ATA-QEMUHARDDISK
  Serial Number   : QM00001
Hard Drive 1     : Present
  Type            : 16384M disk
  Model           : ATA-QEMUHARDDISK
  Serial Number   : QM00002
Hard Drive 2     : Not Present
USB 1            : Not Present
USB 2            : Not Present
CDROM 1         : Present
  Type            : cdrom
  Model           : QEMU-QEMUDVD-ROM
Network Interfaces:
loeth0  addr 52:54:00:e9:70:05 at virtio1, 1af4:0001 (virtio_net)
RxQ(s)/RINGSZ/COALESCE: 1/256/-NA-
TxQ(s)/RINGSZ/COALESCE: 1/256/-NA-
NODE-ID          : -NA-
port1_10 addr 52:54:00:22:f7:85 at virtio2, 1af4:0001 (virtio_net)
RxQ(s)/RINGSZ/COALESCE: 8/256/-NA-
TxQ(s)/RINGSZ/COALESCE: 8/256/-NA-
NODE-ID          : -NA-
port1_11 addr 52:54:00:3e:67:f9 at virtio3, 1af4:0001 (virtio_net)
RxQ(s)/RINGSZ/COALESCE: 8/256/-NA-
TxQ(s)/RINGSZ/COALESCE: 8/256/-NA-
NODE-ID          : -NA-
```

# OS とプラットフォームの乱数生成器のサポート

## 機能の概要と変更履歴

### 要約データ

該当製品または機能エリア	すべて
該当プラットフォーム	<ul style="list-style-type: none"> <li>• VPC-DI</li> <li>• VPC-SI</li> </ul>
機能のデフォルト	無効：設定が必要
このリリースでの関連する変更点	N/A
関連資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>VPC-DI</i> システム管理ガイド</li> <li>• <i>VPC-SI System</i> アドミニストレーション ガイド</li> </ul>

### マニュアルの変更履歴



**重要** リリース 21.2 および N5.1 よりも前に導入された機能の改訂履歴の詳細は示していません。

改訂の詳細	リリース
最初の導入。	21.13

## 機能説明

ASR 5500 および VPC プラットフォームに展開されているいくつかの機能には、特定のタスクを実行するための乱数が必要です。これらのタスクにはカーネル乱数生成器が使用されていますが、生成される数値は、セキュリティ標準規格に従って十分にランダムである場合とそうでない場合があります。ただし、ハードウェアまたはホストが提供する乱数は、信頼性が高く、セキュリティ標準規格に準拠していると見なされます。

OS およびプラットフォームの乱数生成器のサポート機能は、このセキュリティコンプライアンス要件に対応しています。これにより、システム管理者は、ホストマシン上でハードウェア乱数生成器 (HWRNG) を設定できます。

設定されている場合、システムはハードウェアの乱数生成器を使用します。



---

(注) この機能は、HWRNG サポートがホストで使用可能な場合にのみ機能します。

---

HWRNG サポートが使用可能な場合は、ホスト上の libvirt xml ファイルに次の設定を追加します。これにより、クライアント (StarOS) に virtio\_rng サポートが追加されます。

```
<rng model='virtio'>
  <backend model='random'>/dev/random</backend>
  <address type='pci' domain='0x0000' bus='0x00' slot='0x07' function='0x0' />
</rng>
```



---

(注) (前述の設定に示すように) 設定でスロット番号7を使用して競合がある場合、次に使用可能なスロットを使用します。

---

この設定は、それぞれの展開設定に基づいてサポートされているプラットフォームに適用する必要があります。

クライアントでの設定変更は必要ありません。クライアント (StarOS) は、ホストでサポートが有効になっている場合、自動的に virtio\_rng を選択します。

